第４章

生成文法からみた主語論

「サピア・ウォーフの仮説」で有名な
E. サピア

（誤り）　三上章の主語無用論は正しくない。日本語の記述にはやはり主語というカテゴリーが必要である。主語はあらゆる言語の記述に必要な普遍的なものだから。日本語において，主語の存在の構文的な証拠として重要なものが少なくとも二つある。一つは再帰代名詞である「自分」と，二つ目は尊敬表現との主語の照合である。

（事実）　「自分」は再帰代名詞ではない。日本語には再帰表現という語法そのものが発達していない。さらに「自分」が「主語」と一致しない例が多い。尊敬表現では意味解釈を加えた主語が問題とされるが，これでは循環論法である。構文論的見地から見た「主語」では，尊敬表現と一致しない場合が多い。久野や柴谷による三上の主語無用論批判は成立していない。

1　キーナンの主語認定規準リスト

1971 年の三上章の死後，その構文論に対する反論が久野暲（1973）や柴谷方良（1978）から出された。また，それと前後して，キーナン（1976）は世界の言語における主語の認定の規準を 30 あまりの項目リストとして提案した。これらの規準はあまりに英語中心であるとして何度か批判されたが，結果としてはこの

リストをチェックシートのように使って様々な言語が検証され，「○○語における主語」と銘打った論文が相次ぐという事態を生んだ。

しかし，キーナン自身は，このリストのうち，一体幾つの項目に該当すればある言語に主語があると断定できるのか，という議論はしていないのである。むしろある特定の名詞句の相対的な「主語性（subjecthood）」の程度を問題としていたのだった。その立場は彼自身による「このように（文における）ある名詞句の主語性とは程度の問題である」〈Thus the subjecthood of an NP (in a sentence) is a matter of degree.〉という表現にも明らかである。ところが，キーナンのリストは，次第に主語普遍論を裏付けるものと曲解する研究者が澎湃としてしまった。

果たして，「主語は日本語構文論の分析に必要である」と主張する久野や柴谷が根拠としている「構文的証拠」は30どころか，わずかに2～3点である。つまり，キーナンの論文が本来意図していた「主語性（subjecthood）」の相対的重要度（例えば，「ある言語における名詞句Aは他の名詞句Bよりも主語性が高い」，あるいは「ある言語Cは他の言語Dよりも主語と見なしうる名詞句を持っている可能性が高い」など）は，日本語において，極めて小さいと言うべきであろう。ところが，久野や柴谷のアプローチには「一つでも構文的証拠と見なされるものがあればその言語には主語がある」という，第2章で指摘した「論理のすり替え」が見られるのである。

さらに2人の方法論が問題なのは，主語と目される「ある名詞句」の形態である。キーナンの想定した典型的な主語とは言うまでもなく英語のそれであるから，これは形が一定である。特に基本文の必要から代名詞を多用する英語においては，主語になれるのは「主格」（あるいは「名格」Nominative）の〈I, He, She, We, They〉であって，〈Me, Him, Her, Us, Them〉などでも〈My, His, Her, Our, Their〉などでもない。つまり英語では「ある名詞句」の具体的な振る舞い方を客観的に分析できるのだ。

これに対して，日本語の学校文法のいわゆる「主語」に特定の形がないことはすでに第2章で見た。つまり名詞に後置される助詞が「は」であったり，「が」であったり，「に」であったり，「で」であったりするのだ。こうした英語と日本語の基本的な違いを久野や柴谷がどう乗り越えようとしたのか，その様子を追ってみよう。

我々は第2章の冒頭でアンドレ・マルチネの主語の定義を紹介した。主語を見極めるために彼が立脚するデータは，ある名詞句の「具体的な振る舞い方」，発話あるいは表記における構文論上，形態論上の現れ方である。日本語の学校文法が主語とする名詞句は具体的に同じ形態をしていない。分析されるべき対象そのものが動いては客観的な分析ができない，という点で，日本語の主語はハイゼンベルクの「不確定性原理」を思わせる。橋本文法の主語の定義は，詰まるところ「動作や状態の主体」であろう。しか

し，これらは発話の際に一定の形を持たないのだから意味論的な定義に留まる。マルチネの構文論上形態論上の「具体的な振る舞い方」とは本質的に異質な定義なのだ。

2　生成文法的アプローチの問題

マルチネ的アプローチと対照的なのがチョムスキーの提唱する生成文法からのものである。1957年以降，チョムスキーの理論は目まぐるしく変化してきた。しかしその基本に深層構造というものを据えていることは変わりがない。普遍文法の主張をするためには，この深層というのはこの上なく便利，かつ不可欠のコンセプトなのだ。

言語相対論をバックボーンに，世界の多くの言語を研究して違いと共に最大公約数的な共通性を見出すことから，一歩一歩「帰納的」に普遍性を追い求めて行くようなアプローチを類型論的とするなら，チョムスキーのそれは明らかにベクトルが違う。

チョムスキー的なアプローチでは１人１人が多くの言語を研究することは少ない。その代わり，英語を含んで二つかせいぜい三つの言語を深く掘り下げる。ここで「掘り下げる」というのは文字通りで，深層構造と表層の間の記述に没頭するわけだ。しかし深層であるから，これは畢竟（ひっきょう），母国語話者の頭の中に入って行かねばならない。英語が母国語でない研究者は，自分の母国語（とそれを映す鏡である英語）の抽象的な比較分析に専念する傾向が強い。生成文法的アプローチほど英語に特権的地位を与える学派は少ないだろう。深く掘る井戸が数少ないのもそのためだが，

基本的なデータを自分の頭の中にある母国語に探ろうとする方法は，マルチネ型の数多い言語に立脚した具体的，客観的記述とはならない。

これら対照的なアプローチに対して私の抱いているイメージはこうである。類型論は底辺の広い三角形だが，普遍文法を目指す生成文法は三角形が倒立している。底辺は狭く，英語が深い根を下ろしている。英語を試金石として，世界の様々な言語の研究者が自分の母国語との比較をする。それを通じて「言語普遍性」を検証し合うという印象が強いのだ。英語を唯一の基本的な「手掛り言語」として他の言語の考察を行うという点で，演繹的なアプローチであるが，それは極めて「英語（エゴ）セントリック」なものであると言わなければならない。

3　ある学会での経験

実は生成文法に対するこういった印象には私なりの裏付けがある。今でも忘れられない1997年夏の思い出をお話ししよう。生成文法の影響が大きい（とは行くまで知らなかったのだが）ある学会に参加したことがある。その学会は名前に日本語と朝鮮語を冠していた。朝鮮語を勉強している私は，この情報をキャッチして狂喜した。残念なことに発表論文の応募の締め切りは過ぎていたが，学会に参加するだけでも，とモントリオールからおよそ８時間かけて車で行ったものだ。会場はニューヨーク州イサカのコーネル大学。３日間のプログラムである。発表論文の応募要項には「日朝両語に関する発表を優先する」とあったので，私は頭の中で，さぞや日朝の言語比較の有意義な発表が聞けるだろうと期待

していたのである。

初日の朝のプログラムから「これは様子が違うぞ」と気付いた。3日間の何十本という論文の中で日本語と朝鮮語を比較していたのは極めて少なかったのである。圧倒的多数はどんな発表をしたのか。日本人と韓国人で米国に留学している大学院生や研究者が多かったが，日本人は英語と日本語，韓国人は朝鮮語と英語の比較なのだった。アメリカ人はと言うと，自分の勉強した日朝いずれかの言語と母国語の英語を比べるわけだ。これには恐れ入った。こういった英語中心の傾向が強いからこそ「日朝両語に関する発表を優先する」などと予防線を張っていたのか，と気付いたが後の祭。この内容にもかかわらず学会の名称に日本語／朝鮮語を併記するなら，別に組み合わせが日本語／スワヒリ語だって日本語／ヘブライ語だっていいではないか。どうせ両者間には関連のない発表が大半を占めるのなら。

驚いたのはそれだけではない。多くの発表は，日本人（や韓国人）が英語で自分の書いたものを読み上げるのだから，英語は分かる。ところが，数学か論理学か，はたまたコンピュータ・サイエンスなのか知らないが，言っている内容が私にはまるで理解不可能なのである。それでも，彼らに共通する姿勢が明らかだった。それは，ひたすら英語を鏡にして，チョムスキーの最新理論を適用することで日本語（や朝鮮語）を説明しようとする姿勢である。

これは第2章で紹介した大槻文彦の精神構造と奇妙に一致するものではないか。圧倒的英語中心主義には驚嘆したが，この会議の発表者にとっては，日本語と朝鮮語を比較したってあまり意味がないのだろう。もっとも当学会の名誉のために付け加えておけば，中にはこちらの期待通りに日朝語を比較したもの，それ以外でも優れた発表もあった。惜しむらくはそうした発表があまりに少数派だったことである。せっかく遥々やって来たのだ。この際とことん付き合ってみよう，と決心し，私は精神修養の思いで3日間どっぷり浸かっていた。往路はあんなに陽気だったのに，帰路はえらく腹を立てていたのを覚えている。

4　理解しにくい生成文法学者の分析

一体どういう言葉で研究がなされているのか，その一端をご紹介してみよう。『月刊言語』（大修館書店）2000年11月号に掲載の論文「否定の意味とシンタクス—生成文法の試み」の一部を引用する。筆者は加藤泰彦氏。『月刊言語』はたまたま手許（てもと）にあった，一般大衆向けとされる雑誌であり，特に難解なものを探して選んだのではない。以下，中ほどを3段落のみ，抜粋する。

> Pollack（1989）は，英仏語の語順と動詞移動の分析に基づいて，否定がそれ独自の投射（projection）をIP投射内にもつことを明らかにした。
> [CP [TP [NegP [AgrP [VP…]]]]]（Pollack 1989）
> つまり，文否定の意味に対応する形式特性は，否定辞を主要部とする機能投射（NegP）が文構造の中に存在することである。

ここでは，少なくとも二つの点が注目される。一つはPollack自身示唆しているように，NegPに対応してAss（ertion）Pを設定することが可能であり，これは「Chomsky（1955）のアイディアの現代的表現である」と言える。この点についてLaka（1990）はさらに一歩を進め「NegPとAff（irmation）Pとは，より抽象的な投射であるΣPの異なった実現化である」とする。つまり「否定は自然言語においては，それ自身独立した統語範疇ではない」ことになる。いずれも初期理論の洞察を受け継いだものといえよう。

もう一つ注目されるのは（i）NegP内の否定辞の位置，ないしは（ii）NegPとIP内の他の投射（特に，時制辞，一致，相の投射であるTP，AGRP，ASPP）との相対的な支配関係，をパラメータとすることにより，否定に関する言語間のさまざまな差異を説明する可能性が開かれたことである。

いかがだろう。チョムスキー学派の研究者以外で，これが難なく理解できる読者がいたら脱帽したい。典型的な通語（ジャーゴン），つまり仲間内にしか通じない言葉と言うべきであろう。繰り返すが『月刊言語』は一般大衆向けとされる雑誌である。私の参加した学会はこの通語の専門家たちのものだったから，その難解さは理解していただけるだろう。

これではもはや，大槻の主語の定義に草野が寄稿した反論から，甲論乙駁（こうろんおつぱく）の「総主論争」を生んだ市民参加型の活況は望むべくもない。とにかく平均的知識人にさえ手の届かない，悪しき専門主義に陥った象牙の塔の住人の言説である。三上章の構文論を「素人の思い付き」程度にしか捉えず，大学に所属する言語学者たちがその真価を見逃したのもこの専門主義，そして大学人の権威主義である。西部邁『新・学問論』（講談社現代新書，1989年）は西部が東大を辞職した理由の一つをそこにおいている。

こういう言葉の横溢する発表を英語で3日間にわたって聞いたわけだ。しかもこれらは聴衆に向かって語りかける風（ふう）の発表ではない。すでにタイプしてある原稿を機械のごとく早口に棒読みするのである。せっかく遠出をしたのに，私にとっては収穫の少ない学会となった。

母語話者でない学習者を対象にする我々日本語教師にとって，生成文法理論の最大の弱点は，その考察や理論が教室で一向に役に立たない，ということだ。英語を準拠として「かきまぜ」なり，移動なり，変形なりで説明する日本語教育が効果的とは思えない。泉井久之助や角田太作も言うように，英語は世界の言語と比較して，いや他のヨーロッパ語と比較してさえ，特殊な言語なのである。社会学者の杉本良夫がオーストラリアから警鐘を鳴らす「英語帝国主義」の最も効果的な戦術の一つが，生成文法カラーの濃いこうした学会であろう（杉本良夫『「日本人」をやめられますか』朝日文庫，1996年）。

極めて特殊な言語の英語を鏡にして，普遍性を主張されては，まったくタイプの違う日本語などは迷惑である，と声を大にして

訴えたい。深層での普遍性を日本語にもあてはめようと論理学的，記号学的，数学的操作をしたところで，それは何ら客観性を持つものではない。少なくとも日本語教師がとるべきアプローチではあるまい。マルチネ的な具体的な物的証拠がない限り，我々としては「そうかも知れませんが，さあ，証拠もありませんしね」と答えるだけでいいのだ。生成文法最大の弱点は，この「検証不可能性」にあるのだから。

一つ，例を挙げてみよう。深層に潜ったとたんに「何でもあり」になってしまう例として「すべての言語には普遍的に/p/音がある」という大胆な仮説はどうだろう。「いや，○○語には/p/音がない」という報告が必ずなされるに違いない。その時，少しも慌てることはない。「この言語では/p/はないが，/f/音がある。これは深層の/p/が変形したものだ」と答えればいいのだ。実際，日本語の「主語」などはこういう扱いをされ，本来存在しないものを「日本語も深層には主語がある。それが表層までに変形や省略を受ける」などと言われてきたのである。「裸の王様」よろしく，服を着てはいるが見えないというわけだ。

チョムスキー派の学者には誠に便利な「深層・変形・移動・省略」などだが，そうした分析が客観的経験科学としての言語学とは思えない。再現，検証できない仮説は，仮説で終わるしかないのである。マルチネが主張するように，発話の場面の振る舞いこそがデータのすべてである。発話で主語がなければ，その言語には主語がないと言っていいのだ。

5　黒川紀章の「共生の思想」

ちなみに，日本を代表する建築家の黒川紀章（くろかわきしょう）が主張する「共生の思想」はアメリカの覇権主義を批判する点で私の立場とよく似ている。黒川は最近カナダのトロントで公開レクチャーを行ったが，その後，カナダの邦字新聞『日加タイムス』紙上（2001.5.25）にインタビュー記事が掲載された。少し長くなるが，引用してみよう。インタビュアーは同紙の田中義章記者である。

「（前略）地球上で今はアメリカが強い国になっていますから，英語がどんどん普及し，そして小国の言葉は消えていく。言葉だけじゃなくて小国の文化も消えていきますね。それがはたして幸せなことかどうかということから，共生の思想が始まるわけです。
私の思想は，そういう考え方は地球にとっても人間社会にとっても不幸せだろうという思想なんです。どんなに小さな国，経済の発展していない国でも，それぞれにユニークな伝統を持っている。それぞれに違った言葉を持っている。それは，決してどっちが上でどっちが下かの関係ではない，と共生の思想は言うわけです。
（中略）ヨーロッパの文化もアメリカの文化も大事ですけど，一方で小国の文化も大事にしていって，それらが地球上で共に栄える――これが共生の思想なんです。
（中略）アメリカのような大国からみれば，それは非常にめんどうくさいことなので，できればグローバル・スタンダー

ドで，アメリカの考え方で共通に世界全体をコントロールしたい，これは覇権主義的な発想ですよね。
（中略）この考え方は，1992年に調印された生物多様性条約と軌を一にするものなんですね」

この最後のところの，（アメリカからみた）グローバル・スタンダードと，生成文法学派の目論む（英語をその鏡とした）普遍文法とは方向性において何と似ていることだろうか。
「小さな国，経済の発展していない国」においてさえ，その伝統的文化や言語を黒川が憂慮するなら，さほど小国でも経済が未発達でもない日本の文化，日本語の復権はなおさら重要であると言わねばならないだろう。

さらに興味深いのは，黒川がこうした覇権主義の根底にギリシャ哲学以来の二元論を見据えていることである。つまり，20世紀までの思想は精神と肉体，善と悪，といった二元論が根本的なヨーロッパの哲学，思想であり，覇権主義もまたその圧倒的な影響下にあるのだが，それが今，壁に突きあたっている。そしてその壁を突破する鍵はアジアにある，と黒川は主張する。

「共生の思想で一番の手本にしているのは（仏教の）唯識思想なんですよ。これが世界最大の思想なんですね。600年かかって4世紀にインドで完成された哲学です。
（中略）根本的なヨーロッパの哲学，思想が二元論だとすれば，このアリストテレスから始まっている偉大な二元論が今，壁に突きあたっている。これを克服するには，ある刺激が必要だと思うんです。それはアジアから来るとずーっと思っていたんですよ」

黒川は日本に関しても興味深いことを述べている。ここでの話題は「共生」ではあっても，次の引用などは，本書第1章で我々が考察した明治期の大槻文法と江戸期の国学者の比較に相通じるものがあるだろう。文法においてもその根本では江戸が正しく，明治が間違っていたのだった。

「それから，もう一つ私が発見したのは江戸ですね。40年前から江戸を研究しなくちゃいけないということを言い続けてきました。
（中略）皆は明治を正しいと思い，江戸は間違っていたと思っていたわけです。福沢諭吉と同じように考えていた。私は明治が間違っていて，江戸が正しかった。もう一度，江戸に戻れと言った。共生の思想は江戸の思想なんです」

6 「サピア・ウォーフの仮説」とチョムスキー理論

「サピア・ウォーフの仮説」という言葉がある。名前の前半のサピアは名著『言語』をカナダの首都オタワで執筆したエドワード・サピアだということもあって，以前から何となく親近感を抱いてきた。不幸にして55歳の働き盛りで亡くなったが，天才的な言語学者であり，最晩年にはアメリカの人類学学会会長でもあ

った。ウォーフはサピアの弟子だったベンジャミン・ウォーフの名前である。

サピアは色々な意味でチョムスキーと対照的である。まずサピアは言語学者である前に人類学者であるから，言語も相対主義的な，類型論（タイポロジー）的傾向が強い。何十という言語，特に北アメリカの先住民族の言葉の研究で有名だ。泉井久之助の名訳のお陰でサピアの『言語』は日本語で読めるから是非一読をお勧めしたい。とりわけ，言語変化の進路や進度を「drift（駆流）」と呼び，大きなうねりと捉える雄大な想像力などは壮大で，冒険小説を読むような面白さがある。人類学と言語学，フィールドと研究室，言語分析における通時と共時など，とにかく極めて学際的で懐が広く，バランスが絶妙にとれた優れた学者であったと思う。その意味では黒川の訴える「共生」型の言語学者とでも言えようか。

主にサピアの教え子のウォーフが積極的に提唱した理論が「ウォーフの仮説」で，それはまた，彼の師事したサピアの名前を冠して「サピア・ウォーフの仮説」とも呼ばれる。一言にまとめるなら，我々は母国語というフィルターを通して世界を認識する，という主張だ。それは，我々の世界観は母国語の文法カテゴリーが分割したものだ，とまで言う。「言葉と文化」などというタイトルの，母国語と世界観の繋がりに関する書物はそれこそ星の数ほど出版されているが，「文化が言語を決定する」のではなく「言語が文化を決定する」という「コペルニクス的転回」を「サピア・ウォーフの仮説」は我々にせまるものである。

「サピア・ウォーフの仮説」とは逆の，ある社会の文化や世界観が言語に反映される方向はより容易に納得できる。例えば日本語には「ウチ・ソト」という社会学的概念があるが，それは社会人としてスムーズに適応して行くために日本人には修得が必要なものだ。牧野成一の『ウチとソトの言語文化学　文法を文化で切る』（アルク，1996年）は，その副題にも明らかなように，日本語の様々な文法項目がいかに「ウチ・ソト」という日本人の社会学的概念文化を反映しているかを考察した好例である。

その逆，つまり「サピア・ウォーフの仮説」も，少なくとも部分的には，正しいだろう，と直感的に分かる気がする。例えば，日英バイリンガルの子供が話をする時，日本語を話す時には控えめで自分の意見をはっきり述べないのに，英語では「人が変わったように」自己主張をする，というようなことを我々は経験として知っているが，これは明らかに，言語が価値観や行動パターンに影響することを暗示している。

それでも私は「サピア・ウォーフ説」を「仮説」と呼ぶことに賛成である。何故なら，「言語が世界観を決定する」とウォーフばりに言い切るのは行き過ぎだと思うからだ。私ならもっと慎重に「言語と文化（世界観）はお互いに影響し合い，また支え合っている」と言いたい。そもそも「文化（世界観）」と「言葉（母国語）」は一方的にどちらがどちらを決定するという関係にはないと思うからだ。「文化は言葉につれ，言葉は文化につれ」という状態が最も事実に近いのではないか。

「サピア・ウォーフ説」の最大の弱点は何か。それはやはり「検証不可能性」である。ある母国語グループに顕著な認識／行動パターンがあるとする。しかし，それを母国語が左右するものと断定する方法が分からない。なるほど，言語も一要因ではあるかも知れない。しかし，他にも歴史，宗教，習俗，地政学的要因，環境の変化……など，要因と考えられるものが多い。認識／行動パターンと母国語の間に特権的な因果関係（後者による前者の決定）を証明することは不可能と思われる。これが「検証不可能性」である。

さて，私がこれまで「サピア・ウォーフ説」を長々と紹介したのは実は伏線である。私が不思議なのは「サピア・ウォーフの仮説」と呼ぶなら，同じく検証の不可能であるチョムスキーの理論全体も何故「チョムスキーの仮説」と呼ばないのか，ということだ。前述した如く，検証ができない「深層・変形・移動・省略」などは実は両刃（もろは）の剣である。「何でも言える」というのはプラスの便利さだが，「理論が正しいことを実証できない」というマイナスの面からも逃げられないのである。

振り返れば，1957年以来，「標準理論」→「拡大標準理論」→「改訂拡大標準理論」→「GB理論」→「Xバー理論」→「ミニマリスト理論」などと誠に目まぐるしくチョムスキー理論は修正されてきた。それは，例えば三上章やマルチネの構文論が，基本線では初めからほとんど変化していないのと極めて対照的である。こうした理論のたび重なる修正の軌跡はチョムスキーにとって決して名誉なものではあるまい。それはこの言語学者の理論に内在する，「理論の正しさが実証できない」という性格に致命的に由来する修正なのだ。軌道修正の連続というこれまでのチョムスキー理論の来し方（こしかた）自体が，それまでの理論は不十分あるいは誤った仮説であったことを雄弁に物語っているのである。

さて，それではいよいよ三上章の構文に反論した久野や柴谷の考察を検証してみよう。生成文法の影響下に，次第に独自の理論を育ててきたこの2人の著名な学者は，三上の構文論を果たして論破したのか。本書で扱うのはこの両者が共通して「構文的証拠」として指摘する2点：「再帰代名詞」と「尊敬表現」である。2人の主張は重なるところが大きいので，本書では主として久野の主張を取り上げ，それに反論を試みる。

7　「再帰代名詞」はいらない

第1点は「日本語の再帰代名詞である『自分』は，意味的に主語に一致する」というものである。久野は次のような例を挙げる。厳密には（75j）は文とは言えないものだが。

(74j)　太郎が花子を自分の家で殴った。
(75j)　太郎が花子が自分の妹より好きなこと

確かに，(74j) の「自分」は太郎のことであり，花子ではない。また，(75j) を見ると，太郎も花子も両方とも格助詞「が」でマークされているのに，自分とは太郎のことだけである。これ

らの例文をもって，学校文法で言うところの主語にあたるのはこの二つの文のいずれにおいても太郎だから，再帰代名詞「自分」は「主語」に一致する，と久野や柴谷は結論するのだ。

では，反論を試みてみよう。まず考察の前提を疑ってみたい。果たして，日本語の「自分」と英語や仏語の再帰代名詞は同じ機能を持ったものなのだろうか。マルチネの言うように，発話で同じような振る舞いを見せるものであろうか。

英仏語で再帰代名詞が使われる典型的な状況は何だろうか。私はそれを「行為者の他動的行為の対象が行為者自身である」状況だと思う。例えば「自殺する」を，ほとんどのヨーロッパ語が「自らを殺害する」という意味で表現するのが一例だ。

(76e) He killed himself.
(77f) Il se tua.
(he himself killed)

(76e) の〈himself〉や (77f) の〈s'（=se)〉が再帰代名詞である。ここで再帰代名詞を使う理由は明らかで，同じ人間が主語（殺す人）と目的語（殺される人）に2度現れるからである。さて，もし日本語の「自分」が英仏語におけるような再帰代名詞であるなら，久野の検証しようとする「自分」を使った最も自然な表現と予想されるのは次の (78j) だろう。ところがこの文は (76e) や (77f) と明らかに意味が違う。(78j) は「憤慨して当然の場面で，じっと堪えた」というようなまったく別の意味の文

になってしまうのだ。

(78j) 彼は自分を殺した。

本書の第1章で私は日本語に「人称代名詞」という文法カテゴリーがそもそも不要であると主張した。「再帰代名詞」もまた西洋語では人称代名詞の一部であることを考慮すれば，日本語に再帰代名詞などはなくて当然なのである。

『反＝日本語論』（ちくま文庫，1986年）の蓮實重彦が語るところの，日仏バイリンガルの息子に使われてショックを受けた「あなた」を想起するまでもなく，日本語の「人称名詞」にはヨーロッパ語の無色な「人称代名詞」にはない意味を帯びている。「自分」とて同じで，それは何よりも濃厚に意味を伴った名詞であって代名詞ではない。例えば (78j) や (79j) のような和文は英仏語に訳そうとしても，上記の〈himself〉や〈se〉は使えない。

(79j) あの人は自分というものを持っていない。

久野や柴谷は「主語」と学校文法で言われているものがヨーロッパ語のそれとは性格や振る舞いが違うことにさほど注目していないのであるから，日本語と英仏語などの「再帰代名詞」の違いに目を向けないのも当然だろう。

再帰動詞を語るのなら英語よりも仏語の方がはっきりしていて分かりやすい。この言語では自動詞と他動詞の形態的な区別がほ

とんどなく，同じ語彙を使うからだ。例えば動詞〈réveiller〉を例に取ろう。これは寝ている人を「起こす」という意味の他動詞である。ならば自動詞の「起きる」はどう言うか。英語ならば自他共に〈wake up〉でいい。日本語には動詞に自他の対立がある。ところが，仏語では再帰代名詞を使って文字通り「自分を起こす」〈se réveiller〉と言うのである。

日本語と仏語を比べてみると，仏語にはその構文上，再帰代名詞がどうしても必要なことがよく分かる。その必要度は英語以上だ。再帰代名詞とは，第一に「他動詞を自動詞化するための手段」だからである。以下，幾つか例を列挙してみよう。前が他動詞，後ろが自動詞である。

〈coucher〉寝かす・〈se coucher〉寝る
〈ouvrir〉開ける・〈s'ouvrir〉開く
〈fermer〉閉める・〈se fermer〉閉まる
〈arrêter〉止める・〈s'arrêter〉止まる
〈décider〉決める・〈se décider〉決まる

仏語との比較から日本語に再帰代名詞がいらない理由が二つ見えてくる。一つは日本語が自／他動詞の，語彙としての対立を豊かに備えているからだ（この自／他動詞に関しては第5章の考察を参照のこと）。もう一つの理由は，他動詞を基本の意味とし，それに目的語「自分」をつけて自動詞化する，という発想そのものが日本語的でないからである。この事実は橋本（1968）がすでに

指摘している。ここで反照的というのは今で言う再帰的語法のことである。

> なるほど『ゆ』『る』等の語尾あるものには西洋語の反照的の言ひかたにあたるものもある。『あがる』は『自らをあげる』のであり，『うづもる』は『自らをうづめる』のであるとして解釈できないのではない。しかし日本語では，後にも，反照的語法は発達しないし，我々の言語意識として『自らをどうする』といふやうに考へるのは不穏当に感ぜられる。それよりも『自らさうなる』といふのが，日本的の考へ方ではなからうか。

今こそ橋本の学校文法の改正を，と切に願う私ではあるが，この引用箇所の橋本の言葉には敬意を表したい。ここまで言い切る橋本が何故，定義を変えてまで大槻文法の主語の概念を守ろうとしたのか，理解に苦しむところだ。

さて，これで久野や柴谷の立脚する「自分＝再帰代名詞」という前提そのものが脆弱であることが明らかになった。そもそも「自分」という言葉自体が外来の漢語であることも，日本人の伝統的な語感を担う資格を疑わせるのだが，一応は久野・柴谷の土俵に立ち，「自分が主語と一致しない」反例を2～3示してみたい。これまでの考察に加えて反例を示せば，久野や柴谷に対する反論は十分妥当性を持つと思う。

8 「自分」が「主語」に一致しない例

すでにOono（1985）も指摘したように，実は，名詞「自分」は必ずしも文中の「主語」に一致するのではない。そうした反例はたくさん挙げることができる。そのために，我々はまたしてもスーパー助詞「は」の助けを借りることとしよう（以下の例文中，「自分」の下線は金谷）。

（80j） 太郎は自分のことを考えていなかった。

という文の「自分」はもちろん「太郎」でもありうるが，それ以外の可能性もある。例えば，この（80j）の前に，（81j）があったとしたらどうだろう。

（81j） 花子は，悲しかった。

俄然（がぜん），（81j）の主題である「花子」はピリオドを越えて（80j）にまでその勢いを及ぼす。そうすると，（80j）の「太郎は」は否定の「は」と解釈され，「自分」がむしろ花子を指す可能性も出てくる。「自分」が太郎を指す可能性も残りはするが，ここで重要なのは（80j）における自分が太郎と一致しない可能性が新たに生まれるという事実である。その場合は，久野の主張に対する反例となる。

Oonoの例を次に引用してみよう。これは作例ではなく，実際に文学作品内での使用例だ。読者は（82j）の「自分」が一体誰のことか（父なのか，祖母なのか）先をすぐに読まないで当ててほしい。

（82j） 父は祖母が自分の家に来てゐることを，前から非常に嫌がつた。（志賀直哉『和解』）

（80j）と（81j）の場合はコンテキストがまだ不十分だから「自分」に当たるのが「太郎」なのか「花子」なのか分からないままだった。それと違い，（82j）は小説から取った文だから答えは特定できる。それは小説を読めば自ら分かるからだ。ではこの「自分」は誰だろう。「父」なのか，「祖母」なのか。

何と自分は「父」でも「祖母」でもないのである。答えは「語り手」であり，それはこの小説を読まない限り分からない。

これで明らかにできたと思うが，「自分」という名詞とスーパー助詞「は」はよく似ている。双方とも，その働きや照合性を語るためには，それを含んだ単文だけを取り上げての考察では不十分だ，という点においてである。格助詞ならば単文で語ってもいいだろうが，「は」や「自分」は段落までコンテキストを広げなければ正しい分析にはならない。

さらに私が見つけたものに，同じ文の中に「自分」が2度表れ，しかもその指す人間が別人という珍しい例もあった。

(83j) 先生の得意なのは詩であった。(中略) その代わり自分に読んでくれるのではなくって，自分が一人で読んで楽しんでいることに帰着してしまうからつまりはこっちの損になる。(夏目漱石『クレイグ先生』)

ここで，最初の「自分」がこの文章を書いている漱石であり，2番目の「自分」がクレイグ先生であることは，最初の方には「読んでくれる」と授受動詞が付いていることからも明らかである。この最初の「自分」は，とても「主語」に一致しているとは思えないが，久野や柴谷にはこれをどう説明できるのだろうか。

ここまでをちょっとまとめてみよう。久野や柴谷は，三上構文論に対する反論の重要な柱として「自分」という「再帰代名詞」に注目した。単文内の主語と自分は照合するから，というのが主張である。

三上の構文論を擁護する立場から，私はこれに再反論を試みた。その中で，

(1) 主語の形が一定でない学校文法の「主語」を説明するには，生成文法的な深層構造を持ち出さざるを得ないが，深層構造や変形などは客観的に検証できないものであり，そうした「チョムスキーの仮説」に私はそもそも納得できないこと，

(2) 出自が外来の名詞の「自分」はその振る舞いが西洋語的な「再帰代名詞」とはまるで性格が違い，同じレベルで比較する正

当性がないこと，

(3)「再帰的な語法」という発想そのものが日本語には希薄で，仏語などにおけるその存在理由も，自動詞・他動詞の形態論的対立を豊かに持つ日本語では不要であること，

の3点をまず明らかにした。その上で，百歩譲って彼らの土俵に立ち，「自分」が単文内の「主語」(や「主題」) に一致するという主張にも明らかな反例を示した。

今，再びマルチネの定義 (第2章) を思い出してみよう。その何と明解だったことか。主語の候補と見なされる，一定の形を持った名詞句がもし具体的な発話において必要不可欠でなければ，その言語に主語はない，という主張である。ここで強調しておきたいのは，マルチネがここで考察の対象としているのは，「すべての文」だということだ。これに対して，久野や柴谷が注目するのは日本語においては甚(はなは)だ末梢的で，果たしてそういう語法があるのかさえ疑わしい「再帰表現」である。さらに，果たしてそれが英仏語のそれに相当するのかも検証されていない「自分」という語を再帰代名詞と同定した上で，単文に絞ったわずかの例を挙げて照合性を主張したのである。

よしんばそうした特殊な表現においてのみ「主語」のコンセプトが必要であるとしても，その事実をもって，それ以外の大多数の文にも「主語必要論」を主張してはいけないだろう。つまり，

初めから，久野や柴谷の試みは極めてその射程の限られたものに留まっており，三上の主語無用論を否定する力はもともとないのである。マルチネと同様，三上の「主語無用論」の対象は，日本語のすべての文であることは言うまでもない。

これに加えて，彼らの主張する「再帰代名詞」議論そのものを検証してみると，反例が幾らでも挙げられることが分かった。ここまで対象となる語法を限定してさえ主張が破綻しているのだから，どう見ても久野・柴谷の反論は無効であるだろう。これをもって，三上の日本語における「主語無用論」は少なくとも「自分」という語に関しては擁護（ようご）できたと信じる。

では，返す刀で尊敬表現をめぐる主語擁護論に対する反論へと移ろう。

9　尊敬表現

尊敬表現である「お～だ」や「お～になる」も意味上の，学校文法で言うところの「主語」に照合する，と久野や柴谷は主張する。

(84j)　山田先生が花子をお叱りになった。
(85j)　山田先生が花子がお好きなこと

上記「再帰代名詞」とまったく同じ論法で，この２文の尊敬表現は，主語である山田先生に照合する，というものだ。またしても（85j）は厳密には文ではないが，まあいいとしよう。

今度は先ほどと違った角度から反論を試みる。マルチネの立場からは，そもそも久野や柴谷が証明しようとしている主語そのものが言語事実として不在なのだ。患者がいなければ治療はできない。「深層」という概念を「検証不可能」として受け入れないだけで，学校文法の主語は否定できるのである。何故かと言えば，先ほど述べたように，発話の時点で「は，が，に，で」など様々な形を取るものを主語，という名前の一つの同じ名詞句として扱うこと自体に，正当性がないからだ。

北原保雄（1981）なども鋭く指摘しているが，久野や柴谷の主語擁護論が結果として循環論法で終わっているのはそのせいである。それを簡単に説明しておこう。何度も言うように，現行の橋本学校文法の主語の定義は意味論的なものだ。それを一応「行為と状態の主体」と表現しておこう。この機能は三上が「が格補語」の機能を上手（うま）く表現した〈doer/be-er〉に近いものと言っていい。橋本が主語の定義として「何が＋何だ（どうする・どうだ）」の最初の「何」と言っているものだから似ていて当然ではあるが。この橋本の定義はチョムスキーの深層構造と変形の仮説にとても都合の良いものだ。

橋本学校文法の主語の大問題は，発話された途端に「が」だけではなくて「田中さんは，魚屋さんです」の「田中さんは」や「田中さんの売った鯖（さば）」の「の」なども主語として扱ってしまうことである。これでは「『が』と『は』の違いは？」など本来問題となる必要さえない「疑似問題」が出て来て当然と言えよう。

つまり，学校文法における主語を擁護する久野や柴谷は，発話において「は，が，に，で」など様々な現れ方をする一群の名詞句をすべてひっくるめて「主語」と「命名」していることになる。しかし，命名することそれ自体が仮説の域を出ないものだ。「命名は説明ではない」〈A name is not an explanation.〉と言ったのはComrie（1981）だが，蓋し名言であると思う。

尊敬表現の「お～だ」や「お～になる」が意味上の行為者や状態主に一致するのは，考えてみれば当然のことだ。しかし，それは発話では形が一定しない，という意味からは，構文論的言語学的な事実ではない。「意味上の行為者や状態主」を久野や柴谷はいったん仮説として「主語」と命名し，発話された単文にそれら形の一定しない名詞句たちを「再発見」しているにすぎない。これが，彼らにとっての，日本語に主語がある「構文的証拠」であるが，またしても「観察の対象が動く」という意味でハイゼンベルクの「不確定性原理」を援用したいところだ。私やマルチネの立場からはこれらは単なる循環論法であり，説明となっていないのである。もちろん，これは先ほどの「自分」に関しても言えることだ。

10　尊敬表現に主語が一致しない例

先ほどと同じように，まず久野や柴谷の考察の前提そのものを批判した。それに続いて以下に反例を示すことにしよう。もし，尊敬表現を使って本当に客観的（つまり具体的に目に見える形で，

構文的，形態論的）に「主語」を説明しようとするなら，意味への偏重を止め，もっと形にこだわった，例えば次のような例文を使うべきである。

(86j)　この地方は，お米がよく出来る。
(87j)　山田先生は，英語がよくお出来になる。

この両文は，完全に構文的，形態論的に軌を一にしている。そして（86j）における「出来る」の「主語」は何だろうか。そう問われれば，いかに久野や柴谷とて「お米」と答えるしかないだろう。それなら，（87j）の主語も，「お米」に構文的，形態論的に，具体的に並行している「英語」でなくてはいけない。こういう説明なら「構文的証拠」と言えるし，よく理解できるのである。

しかし，そうすると，久野や柴谷との主張とは反対の結論が出る。言うまでもなく，（87j）の「お出来になる」の尊敬表現の対象は，構文上の主語である「英語」ではないからである。久野や柴谷のように（87j）の主語を「先生」と見なせば主語と尊敬表現は一致するが，（87j）の主語を「先生」と見るには「意味的に解釈した上で，学校文法的（意味上の行為者や状態主という）主語を再発見」しなくてはいけないのだ。それは私にとっては断じて構文的証拠とは言えないのである。

（87j）において，もし主語というものがあるとしたらそれは

「英語」であって決して「山田先生」ではありえない，と思われるもう一つの理由は「出来る」という語彙そのものである。「出来る」とは「出て来る」と書くではないか。日本語に即した文法であれば，こうした語形にこそ関心を払ってほしい。日本語の「可能」はそもそもが「努力しないでも自然にそうなる」という表現であり，もう一つの可能表現である「れる／られる」が可能の他に受身／自発／尊敬をも併せて表現するのもそのためであることは良く知られた事実だ。

ここに英語を上手に話している山田先生がいる。努力をせずに「出て来る」のは英語か，山田先生か。英語である。動詞「出来る」の「主語」は，ゆえに英語であって山田先生ではない。英語に主格補語マーカーである「が」がついているのも極めて当然なのである。ところが，そうすると尊敬表現「お出来になる」は主語である「英語」に一致していないから，これは久野や柴谷の主張の反例となる。

11　英訳して日本語を考察する不思議

今度は逆に，日本語の視点から英語を考えてみよう。私が長年不思議に思っていることの一つだが，日本語の文法研究者の中に，英語に翻訳しつつ日本語を考察しているとしか思えないタイプの人たちがいる。その理由は良く分からないが，英語を鏡にした普遍文法を念頭においているせいと思われる。

例えばここに，

(88j)　田中先生は，ロシア語が分かる。

という文があるとしよう。この文の主語を「田中先生」とする人がいれば，その人は文を一旦英訳をしたとしか思えない。時枝誠記は，(88j) における「ロシア語が」などをわざわざ「対象語」などと名付けたが，これは「ロシア語が」が述語「分かる」の主体でなくてむしろ対象であるという意味である。

ところが，これまた学校文法の主語のなせる業なのだ。「対象語」などという新しいカテゴリーを作って文法を重くする必要はまったくない。何故そうするか，と言えば，それは「が格」という形を見ずに，述語の「分かる」を一旦英語の understand と訳し，その主語を「田中先生」，目的語（＝対象語）を「ロシア語」と「再解釈」しているからである。再解釈が日本語を英文法で記述するための常套手段であることは言うまでもない。

私が日本語をつくづく不幸な言葉だと思うのは，まさにこうした根拠のない「再解釈」を目にするからだ。日本語がここで「ロシア語が」と「が格」をわざわざ添えているのは，日本語の論理に従っているのである。学者の多くはその事実に目をつぶり，主格補語として解釈しない。これでは三上が日本語文法を「第二英文法」と揶揄したのも無理はない。

再解釈のからくりは実に簡単で，述語の「分かる」を英語の〈to understand〉と同じものと見なすことにある。第 3 章で森有

正が「ぼくはさかなだ」を（英語の〈I am fish.〉にあたる）仏語の〈Je suis poisson.〉と訳した前提の誤謬を取り上げたが，ここもそれによく似ている。文としては座りが良くないが，あえて（88j）を英仏語に直訳してみよう。〈to understand〉という言葉は不適当であって，「分かる」はむしろ〈to be comprehensible/to be understandable〉と訳さねばならない。

(89e) (As for) Professor Tanaka, Russian is comprehensible (to him).

(90f) Le professeur Tanaka, le russe (lui) est compréhensible. (the professor Tanaka, the Russian (to him) is comprehensible)

実は，これこそが久野や柴谷の分析の逆方向に，「日本語的発想の英仏語にしたもの」である。英語から日本語を眺めるのではなくて，日本語の発想で（88j）から英仏語を眺め，あえて「意味的に再解釈した主語」の珍妙さを味わっていただくために作ってみたのが（89e）と（90f）である。あまり自然な英語や仏語ではないが，それは大きな問題ではない。

さて，（89e）の主語は何か，をここで考える。構文論的には，誰がどう見ても明らかに「Russian」であるが，あえてそれを認めず，「意味的に再解釈」をして主語は「Professor Tanaka」だ，と主張しているのが久野や柴谷である。そうしなければ，（89e）にまったく並行した文である，

(91j) 田中先生は，ロシア語がお分かりになる。

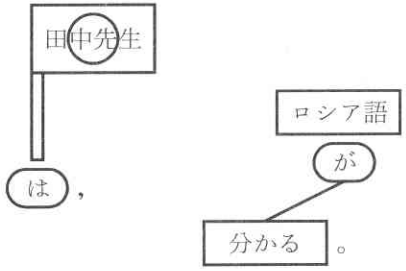
の「主語」は「ロシア語」になってしまうからだ。これでは彼らの言う「主語と尊敬表現の一致」は成立しない。ここはどうしても「田中先生」に主語になってもらわなくてはいけないわけだ。そこで，構文論的に明らかな「主語」と思われる「ロシア語」には目をつぶり，意味的に再解釈した「田中先生」を選ぶ。「田中先生」はすでに学校文法的主語であるから，それを再発見するという循環論法が，ここでまた展開されるのである。

12 日の丸と盆栽で見る尊敬表現

我々の立場はこれまで同様，発話時の具体的な振る舞いのみを考察の対象にするから，

(88j) 田中先生は，ロシア語が分かる。

を次のように分析する。「田中先生は」は主題。つまり日の丸だ。文はここでいったん切れる。「さて，いいですか，田中先生



のことを話しますよ」という聞き手向けのサインであって，主語などと言うものではない。主題であればこそ「田中先生はロシアで見かけた」でも同じ「田中先生は」でいいのである。しつこく言うようだが，日の丸と盆栽に文法関係はない。さて，この（88j）では「日の丸」の下に盆栽が一鉢見える。

それは動詞文だ。「ロシア語が分かる」は自動詞文で，「分かる」に主格補語「ロシア語が」が添えられたものだ。簡単な構造の，極めて理解しやすい文である。「分かる」とは読んで字の如く「自(おの)ずから分けられる」という意味で，動詞に含まれるwakaruの後半は動詞「ある」起源の，「始まる・止まる・決まる・閉まる」など一連の自動詞に共通のものだ。だから「『分かる』の主語は何か」と問われれば，それは主格補語の「ロシア語が」でしかありえない。自動詞文に「が格補語」が添えられるのは最も自然なことで，もし動詞が他動詞の「理解する」であったら「を格補語」の「ロシア語を」が添えられるところだ。自動詞「分かる」を述語とするこの文に，百歩譲って「主語」があるとしても，それは断じて「田中先生」ではない。

つまり，意味的再解釈を受け入れない我々の立場からは，（88j）においても，また（88j）と完全に並行した尊敬表現である（91j）においても，「主語」は依然として「主格補語」の「ロシア語」である。尊敬表現「お分かりになる」は主語と照合していない，と我々は結論する。久野や柴谷の主張はここでもやはり破綻していると言わざるを得ない。

主語擁護論の第2の柱である尊敬表現もこうしてマルチネ的立場に立脚することで反例が示せた。尊敬表現も先ほどの再帰構文と並んで特殊な語法であり，日本語のすべての文をカバーするものからは程遠い。これまた射程の限られた語法における主語擁護論ではあったが，それさえも，具体的に観察できるレベルで反例が示せた。かくして主語擁護論は不成立と断定しえるだろう。三上章の主語無用論はその死後30年を経てなお健在である。

さて，現行の学校文法や日本語文法のように，主語を自明のものとしてしまうと，そのフィルターのために逆に見えなくなってしまうものがある。第2章で考察した基本文もそうだし，人称代名詞の問題もその例だが，もう一つ極めて重要な分野がある。それがこれから扱う自動詞と他動詞の対立だ。日本語が本来備え持っている一つの整然とした原理が，残念ながら主語というサングラスのせいでまるで見えなくなっている。主語必要論の明らかな弊害として，第5章では自／他動詞の誠に不幸な現状を考察してみよう。サングラスをはずすことで，これまで理解が阻(はば)まれてきた日本語の自／他動詞の仕組みが今こそ体系的に解明されるであろう。